

# 大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町 京都大学教育学部図書室 (竹村心気付)

TEL 075-751-2111 (内3013)

## 自発的な学習研究活動をめざして

—京大班からの報告—

隅 田 雅 夫

京都大学には、数多くの図書館(室)があり、パート職員も含めてたくさんの図書館員が働いています。図書館(室)の規模や内容も多岐にわたっていますが、現在、全体の3分の1ぐらいの80名足らずの職員が、大図研の会員になっています。この会員のなかから、全国委員会常任委員として3名、京都支部委員として5名が、それぞれ選出されており、学外での大図研活動をしている会員の多いことも特徴です。もっとも、会員数の点から言えば当然のことかも知れません。

京大班では毎月1回の定例会をもち、各職場やブロックの世話役である幹事(現在、9名)を中心に、全国や支部の活動状況やニュースの報告を受けたり、種々の情報交換や各職場での現状・課題の報告などを行ないます。幹事のうち、1名が班長、2名が副班長となっています。この定例会を通じて、会誌の配布や、大図研の行事、事業などの広報も行ないます。ここでは、京大班での新しい試みも含めて、2・3の活動状況や課題を報告します。

まず第1に活動状況として、最近の本誌No.172でも紹介されましたが、数年来つづいている「参考図書研究グループ」と「索引研究

グループ」の活動です。前者は、人文系・自然系部局から8名が参加し、参考図書の評価について学習研究しています。この成果は先に大図研論文集に報告したところですが、現在は、参考図書の形式ごとにその評価方法について、とくに書評からの評価の可能性について検討しています。先の報告を総論とすれば、各論にあたる部分になるわけです。後者のグループは、人文系部局から5名が参加し、人文系で実務に使えるような関連索引の作成を意図しています。具体的には、LCの関連索引を出発点としてこれにNDLC、NDC、DC、さらに法学部の独自分類との対応を検討しています。困難で根気の必要な作業なので、なかなかかどりませんが、作業の中でそれぞれの分類表の特徴や違いがしだいに理解できるようになったとのこと。

第2に、新しい活動として、「談話会」の提案をしました。とりたてて新しい試みというわけではありませんが、誰が主催するということではなく、自分の学習研究したいことを、もっと肩の力を落として自由に自発的に小さな規模で、談話会的にやってみようじゃないか、という主旨です。また必要ならば、チューターとして適当な会員を幹事会として

お世話してもいいし……と、2月には、各職場・ブロックごとに懇談会も兼ねて呼びかけを行ないました。また、今回とくに強調したのは、日頃あまりにも現場密着の問題を扱うことが多いので、公共図書館も含めた図書館現象にまつわる種々の問題、トピック、テーマについて、また、歴史的・地域的な現象についての学習研究も必要じゃないか、ということでした。しかし、呼びかけに対して意見の多いのは、やはり今自分が抱えている課題やコンピュータ化のことで、それだけ現場が深刻になっていることを示しています。現在、2つの談話会が発足しています。ひとつは、最近出版された Ruth Hafter 女史の「Acade-

mic Librarians and Cataloging Networks」を読もうというもので、アメリカで実際に書誌ユーティリティを使って目録作業をしている現場の声を分析した本です。もうひとつは図書館業務でのコンピュータ利用について全くの初歩から学習したいというものです。

最後に、課題として会員ひとりひとりの要求・学習意欲をどういう形で実現するかがあります。談話会もひとつの試みですが、懇談会や懇親会などで、コミュニケーションを円滑にしていくことも必要です。もう少しこの点について述べたかったのですが紙数が尽きてしまいました。今後ともよろしく。

(京都大学数理解析研究所)

## — 収書・選書論ゼミナールから —

大図研ゼミナールの通知を受け取ったのは申し込み〆切の前日。それも何ぞか神奈川支部の都築さんから。あわてて竹村さんにTEL。収書・選書ゼミに入れていただきました。

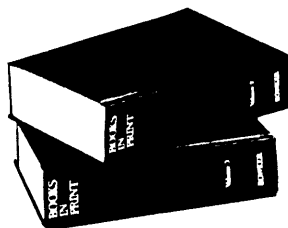
只今、私が発表の第3回が終了。今回から「蔵書構成と図書選択」(河井弘志ほか編・日本図書館協会・1983)を読んでいくことになり、アルファベット順に発表したらということでトップバッターとなった次第です。さて、私はといえば本の内容を理解するのに精いっぱい、そのあとの竹本さん、沢居さん、鈴木さんの経験に基づく熱のこもったお話をひたすら聞き入っておりました。

最後になりましたが、収書・選書には以前から興味は持っていたものの漠とした状態にあった私にこの様な機会を与えて下さった京都支部に感謝!

(大阪支部・伴 潤子)

私は以前、「大図研学校」に参加したことはありますが、ゼミについては初めてです。図書館で収書係をしているわけでもなく、研究所の資料室で関連の業務をしているわけですが、とりわけ「収書」のみをしているわけではありません。しかし、収書論を本当に学ぶことは大変大事で、今後深めていきたいと思えます。職員の専門性がよく話題になります。自主的な研修が大事だと思っている今日このごろです。よろしくお願いたします。

(同志社大学・前川一雄)



ゼミ生は現在7名、内中央図書館が4名、学部図書室が2名、研究所が1名である。わがゼミは、担当講師の河井弘志先生が東京圏在住のため指導はもっぱら通信教育によっており、ゼミそのものは我々ゼミ生だけの手によって運営されている。

第1回は、運営委員によるレジュメとそれに対する講師の河井先生の長文の手紙による意見をもとに、自己紹介とフリートーキング。第2回は、「立命館大学図書館における収書・選書問題の実状と問題点」及び「書店と大学図書館－特に生協書籍部との関係」について報告を受け、フリートーキングをおこなった。

この2回の討論で実務上の問題点や各所での工夫・経験が報告されるとともに、理論的な問題、たとえば、職員の図書選択権の理論的根拠や図書館と学部での収書の調整の根拠になる蔵書構成論への関心等がだされた。そこでさしあたって「蔵書構成と図書選択」（日本図書館協会）を3月から5月位までか

けて読むことになり、分担をきめた。

3月の第3回ゼミで「1. 図書選択・蔵書構成とは何か」「2. 蔵書構成」「3. 図書選択の自由」の3章（107頁）を読んだ。みなゼミの日までにじっくり読んでくる予定だったが、結局、前夜になって一気に読んだり、はなはだしくは当日にあわてて読んだり（報告者は別です）といった状況だったが、それでも勉強できてよかったというのがその日の出席者全員の感想だったようである。

この本を読みおわったらどうするかはまだ未定であるが、ひとりではなかなか勉強できないので、みなと一諸にまずじっくり勉強する、という方向で当面すすんでいくのではないかと思っている。

収書・選書論、特に大学におけるそれは、比較的未発達な分野であり、それだけにゼミ運営の具体的展望はまだはっきりしない。しかし、継続は力なり、をモットーにボチボチあせらずにやっていきたい。（ゼミ担当委員・竹本文夫）

## 電算化は自主性が大事

学術情報システムをめぐる、最近注目すべき動きがあります。

国大図協の『報告』（1987.6）やシンポジウム（1987.10）で明確にされたことですが、国大図協の推進グループは、大学図書館の基本課題を、目録情報を中心とする図書館ネットワークによる業務の省力化に置き、そのために自らのシステムをネットワーク向きに変えることを各個別図書館に要求しています。

そしてこの立場から、いままでの大学図書館の電算化を「反省」しています。

たしかに4年前には、図書館ネットワークの目標を、目録システムは学情セ、ハウスキーピングシステムを各図書館が維持し、両者を結合して図書館業務のトータル・システム化の実現をはかるとしていたこととくらべる

と、大きな方針転換です。

この背景には、学情センターが発足し、接続館が増えた（1987.11 現在で44大学）ものの、目録所在情報データベースへの入力量が26万冊にとどまり、「10年もこのままだと社会問題にもなる」（倉橋英逸東工大事務部長のシンポジウムでの発言）という危機感があります。

このような立場から、学情センターの目録システムの仕様変更（典拠コントロールの任意化、書誌の階層構造の2階層化）と、個別図書館における目録システム優先化の「指導」がおこなわれるに至ったわけです。

このような動きにたいし、「全国総合目録」と学情センターの目録所在情報データベースを区別して考え、大学の教育と研究にふさわ

しい目録のあり方を基本にたちかえして研究していく、また個別図書館の電算化についても、ネットワーク指向以外はすべて切り捨て

ということではなく、大学図書館の役割から自主的民主的に考え、実践していくことが大事だとも思います。(S)

## 国会図書館の『科学技術文献サービス』について

### 堤 豪 範

6～7年前に大図研で、資料研究という新しい言葉が生まれ、人文・社会学系及び自然科学系を問わず図書館員が資料に精通するための研究を日常の仕事を通じて行う事が提起された。京大班の参考図書の研究グループをのぞいて、最近はあまりこの資料研究がされていないように思う。人事異動のせいもあってか、現場で落ち着いて、じっくり図書館の資料について研究する気になれないのかもしれない。

しかし、このような状況の中で私自身ちょっと気分がかわってきた。ある人から、自然科学系、とくに理工学分野の図書館員が資料を知るために役に立つ良い文献が見つかったと教えられたからである。それは、国会図書館科学技術資料室のスタッフが執筆して発行している『科学技術文献サービス』という雑誌である。特に67号(1984年)特集・科学技術資料と70号(1984年)特集・抄録、索引誌が業務の上でも、資料研究の上でも非常に参考になる。

67号の特集には、テクニカルレポート、博士論文、学協会ペーパー、規格資料、翻訳文献資料、会議録、特許資料、データ集、アメリカ官庁資料、原子炉設置許可申請書について資料解説がされている。この中で約半分がテクニカルレポートについて解説されている。テクニカルレポートの沿革、特徴、内容などその特色が紹介され、AD・PBレポート、OSRDレポート、TOMレポート、DOEレポート、INISレポート、NASAレポート、国内刊行のレポート等かなり詳しく述べられている。

70号の特集には、年間450万件を越えると推定されている科学技術文献の中から、必要とする情報を迅速かつ的確に選ぶために必要

不可欠な抄録、索引誌の解説がされている。雑誌記事索引をはじめ、Bulletin Signaletique, Referativnyi Zhurnal, Engineering Index, Current Contents, Science Citation Index, Government Reports Announcements & Index 等が、科学技術一般・総括誌として解説され、続いて、数学、天文学、物理学、地球科学、建設工学、機械工学、運輸工学、電気・電子工学、エネルギー・原子力工学、化学・化学工学、食品工学、金属・鉱山工学、印写工学、生物学、農学と各分野ごとに集められている。科学技術文献速報はそれぞれ関係している分野に入っている。最も便利だと思ったのは、解題の後に図表の部があって、すべての抄録、索引誌を一覧表にしてある事だ。例えば、Engineering Indexは創刊年が1885年からで、月刊、工学分野、年間収録件数110,000件、英語、シソーラスにわかるものはSubject Headings for Engineering、機械可読ファイルはCOMPENDEXと一目でわかるようになっている。また、この中で、オンライン検索の利点とマニュアル検索の利点についてふれてあり、両者を併用することによって総合的な検索が可能となると述べている。

簡単にほんの一部分を紹介してきたが、この特集は、とにかく、いい宝物がみつかったという感じだ。今までの勉強不足をとりもどそうと一気に読んでみて、おそまきながら、やっと自然科学分野の文献に興味をもてるようになった次第である。

(京都大学工学部)